

第3回 土佐の皿鉢ゼミ開催

（於 高知大学朝倉キャンパス）

2019年8月21日（水）に教職実践高度化専攻（教職大学院）院生の実践研究発表「第3回土佐の皿鉢ゼミ」が、教職大学院の院生、専任教員、教育実習指導者、教育委員会、大学内外の教育関係者等、約270名が一堂に会し開催されました。ここでは、院生の取り上げた高知県の様々な教育課題について、1年生及び2年生の研究成果の報告がなされ、更なる課題を探ることを目的に、現時点でのそれぞれの研究課題を多様な視点から分析することで実践的な探求ができました。

はじめに柳林信彦専攻長の開会挨拶があり、続いて櫻井克年学長の挨拶のあと、高知県知事尾崎正直氏より「高知県の教育改革と新たな時代への挑戦～高知県の教育と教職大学院に期待すること～」と題した講話をいただきました。尾崎氏からは、本大学院への期待として、現職教員の資質向上に欠かせない「確かな理論」と「豊富な実践」により指導力を高めるリーダー教員の育成と、貴重な学びで学校現場に新たな風を起し研究結果を県内隅々に広めることの重要さが語られました。その後「学校運営コース」（4名）「教育実践コース」（8名）「特別支援教育コース」（12名）にわかれて、それぞれポスター発表が行われ、共通する本質的問題についてコース別・テーマ別協議が行われ、最後には、コースの枠を超えた全体討議により多くを学ぶことができました。ここでは、皿鉢ゼミでポスター発表した院生から、それぞれの研究課題におけるこれまでの成果と今後の課題を語ってもらいました。



【学校運営コース】

M2 坂本興彦さん 学校経営計画の効果的な運用の方策～《若手教員＋ミドルリーダー＋管理職》による効果的なOJTシステムの構築～



学校の組織化と教員の自律化の方策として、「学校経営計画を活用すれば、OJTでマネジメントスキルを磨くことができる」の仮説に基づき、「学級経営計画作成マニュアル」の提示、学校経営計画との対応や教師行動での記述等のレクチャー、希望者への具体的な作成アドバイスを実施した結果、教員個々のマネジメントへの親和性を考慮した分掌配置や、段階的な管理職候補の育成が可能となるなどの、学級経営計画を作成する利点が示唆されました。

M2 澁谷具恵さん 学校組織マネジメントの研究～地域協働参画による～



「地域の教育資源を最大限に活用した教育・学びのネットワーク構築」の方策として、「総合的な学習の時間」の取組状況及び、学校と地域をつなぐ「地域コーディネーター」の実態把握を行いました。その結果、地域の実態や将来を見据えた「総合的な学習の時間」のプログラム開発の必要性や「地域コーディネーター研修会」のさらなる充実と、学校・地域ボランティア・地域コーディネーター間の横のつながりの重要性が示唆されました。

M1 黒瀬小百合さん 高知県中学校教育における組織マネジメントのあり方



教諭が学校経営方針そのものに参画できるシステムの構築が目的です。そのために、学校マネジメントの理解と学校運営に意欲的に参画する教諭が必要だと考えます。校務分掌活動を通じたマネジメントスキルの獲得、当事者意識の向上、共に学校をよくしたいという同僚性の涵養によって、学校が活性化すると仮説を立てました。校内の会議の言動を分析し、OJTによる同僚性の向上と人材育成を学校組織マネジメントの中で実現する方策を検討したいです。

M1 山崎弥生さん 市町村教育委員会における学校への効果的な支援の在り方～香南市の教育行政を通して～

学校が本来の役割を果たすためには、市町村教育委員会の支援が欠かせないものであると捉え、教員が豊かな環境の中で働くことができるための方策について研究しています。そのためにはまず、教職員の勤務実態の把握から始めました。日々の時間外勤務は、小中学校ともに多くの月で45時間ラインを超えている実態が明らかになりました。今後は、学校と教育委員会をつなぐ指導主事の勤務実態の把握と併せて、効果的な方策について研究を進めていきます。



【教育実践コース】

M2 杉田亮介さん 児童・教師・保護者がつながる学級経営の開発的実践～予防・開発・継続に視点を置いた介入プログラムの作成実施～



本研究では構成的グループ・エンカウンターの手法を用いて、「他者理解」「自他の尊重」をテーマとする授業プログラム開発を行い、その成果の検討及び親子会話への波及を目的としました。皿鉢ゼミで行ったポスター発表やコース別協議でいただいた助言をもとに、今以上に子どもが保護者に話したくなる実践を行うとともに、親子会話を通して保護者が子ども達の変化に気付けるきっかけとなる授業プログラムを作っていきたいと考えています。

M2 竹本佳奈さん 高知県における小中連携に関する教師ビリーフの検討～CAN DO リストの活用に着目して～

小学校英語を中学校で発展的に活かすためには、小・中学校の連携や接続が重要です。高知県内4中学校10人の英語教師に対する小中連携に関する質問の回答から、小・中学校の教育内容をつなぐCAN DOリストの必要性、CAN DOリストの機能を教師が理解し、実践することが示唆されました。CAN DOリストの実施体制の現状と課題について明らかにすることができたので、今後はCAN DOリストの機能面について研究を深めていく予定です。



M2 平林香里さん 支持的基盤のある学級づくりにつながる道徳授業の在り方に関する実践的研究～総合単元的な道徳学習の実践と支持的基盤形成状況の把握～

今年度は、中学校において言語活動を生かした道徳授業を要とした総合単元的な道徳学習を実践し、その効果を検証して、支持的基盤のある学級づくりのために有効な道徳授業の在り方を明らかにすることを目的としました。結果、言語活動を要とした総合単元的な道徳学習により、生徒は道徳の学習に意欲的に取り組み、多様な視点を取得して物事を考えながら道徳性を育み、学級の連帯感等を高め、支持的基盤のある学級を形成していくことが示唆されました。



M2 村田由香梨さん 数学科の主体的・対話的で深い学びにつなげる授業改善～学びを深める教材と指導法の開発～

アンケート調査による生徒の数学に対する実態把握と授業による変容の分析、数学学習理論に基づいた発展的な教材と指導法の開発について研究してきました。数学学習理論に基づいて発展的な授業をデザインすることは、教材開発や授業構成だけでなく、指導方法の指針としても有効であること、また生徒の意欲を高め、理解につながる事が明らかになりました。今後は、生徒の思考過程を意識した指導を行うための発問や指示を組織化、構造化していきます。



M1 上岡栄二さん 数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動の充実

数学的活動を充実させるために生徒に身近で興味関心を引き出すような具体的な教材を開発し、生徒が試行錯誤しながら、主体的にかつ協働しながら問題解決するような学習方法を研究してきました。生徒にとって問題を発展的に作っていくことは、あまり経験していないということが授業実践から明らかになりました。今後は教材開発を中心に行い、その教育効果を客観的に評価するために、授業実践を行い、アンケート調査を実施して分析・考察していきます。



M1 楠目安由さん 理科の資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」～生徒がメタ認知能力を発揮する場面を設定した理科授業を通して～

中学校理科の課題の解決に向けて、メタ認知に着目し、生徒のメタ認知を促す有効な手立ての開発をめざして研究を行っています。実習前半はメタ認知に対する生徒の意識調査と理科授業における生徒のメタ認知を促す教師の発問の実態調査を行い、「メタ認知のモニタリングとコントロールの発揮を促す板書の工夫」と「自己の思考の内省を促す発問の工夫」の手法を用いた授業を行いました。今後は他単元でも授業を行い、この手法の有効性を検証していきます。



M1 竹村理志さん 自己指導能力を育成する生徒指導のあり方～セルフコントロールに着目して～

私は生徒指導の意義である「自己指導能力の育成」を焦点化し、セルフコントロール（自中心、以下SC）に着目しました。前期は、既存尺度やインタビュー調査等による中学生のSCの実態把握を行いました。SCの学年差や性差は認められなかったため、下位項目ごとに分析したところ、「誘惑」と「衝動性」に関わる項目に学年間の有意差が認められました。後期は介入プログラムの開発をし、有用性の検討を行うことを目的として研究を進めたいと思います。



M1 横川理水さん 自己の生き方について考えを深める道徳の授業づくり～討論型の授業の創造と実践を通じた児童の変容の分析～

目的は、児童が自己の生き方について考えを深められるような討論型道徳授業モデルの開発です。討論型授業によって、自分事として考えようとしている児童が増えた一方で、自分で考えて行動できるような確かな考えがもてるまでにはなっていないこともうかがえました。今後は、児童理解をさらに深め、個に応じた支援を行ったり、討論を核としながら授業全体として道徳的価値の自覚を深められるように構成をしたりと、さらに工夫していきたいです。



【特別支援教育コース】

M2 小川裕代さん 実態把握に基づいた指導の追及と教育相談技術の向上～特別支援学校による相談支援～

実態把握と指導の連動を目指した相談活動の在り方を検討するため、小学校への訪問支援を実施しました。結果、心理検査の活用が児童の見立てや指導支援に有効であったとの評価を得ました。特に自立活動（小集団授業及び個別課題指導）の教材提供、指導提供は有用性が高く現場のニーズを確認することができました。特別支援学校がセンター的機能を担ううえで、現場のニーズに応じた相談支援技術をどう身に付けていけるのか考察していきます。



M2 近藤 柝磨さん フィンランドの特別支援教育における幸福感の枠組みを用いた自立活動の実践

これまでの研究から、幸福感を用いることで児童生徒が主体的かつ安心して自立活動の学習に取り組むことができるのではないかと、そのために必要な指導の方向性が分かっています。今回の血鉢ゼミでは、幸福感を用いた自立活動の計画や指導について多くのご助言を頂きました。これからの研究では、幸福感の枠組みを用いた自立活動の計画、指導に必要な要素をより具体的に追究していきたいと思っております。



M2 名倉 忍さん 小学校低学年児童への学習困難に対する早期支援～MIMの活用を中心に～



読みの流暢性を鍛える MIM 特殊音節指導をどう学校現場に取り入れていくか、実習校で提案し1学期間実施しました。児童へのフィードバックの方法や、指導の内容・頻度等指導に関わる課題と、指導の役割分担の徹底など体制に関わる課題が見えてきました。また、現場の先生方に指導の必要性を理解してもらえるように、読みの流暢性と学力の関連性について、他学年でも分析を進めていく必要があるのではないかと考えています。

M2 奈良雅子さん 発達障害を有するもしくは発達障害の支援が有効な子どもへのチーム支援～課題解決に繋がる支援会議の要素の抽出～

今年度は特別支援学校の支援会議に着目し、課題解決に繋がる協議の構成要素の抽出をめざしています。現段階では、心理検査の結果の活用、行動観察に基づく分析、UDに基づく授業づくりの視点、メンバーの選定と役割分担の明確化、R-PDCA サイクルに基づく協議、協議の継続性と定期性の確保、ホワイトボードの活用による目標・思考の可視化、タイムマネジメント、協議のファシリテーションの10項目に着目しており、今後その妥当性を検討していきます。



M2 畑山ふみさん 特別支援教育における自己理解と言語的表現の支援～コミュニケーションに苦手さを持つ高校生の認知特性を活かした指導の工夫～



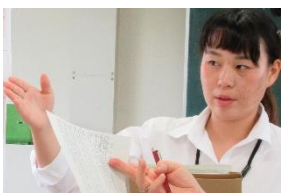
今年度は自己理解・他者理解を意識した関係維持スキル・主張スキル習得をねらいとした全体指導及び個別指導を行い、個別指導で習得したスキルを全体の場で般化できることを目的としました。結果、個の困り感に配慮した手立てや視覚・聴覚・体性感覚を意識した活動は、個別指導だけでなく、全体指導の場にも有効であり、個の教育的ニーズに応じた学びとなることが明らかとなりました。今後は関係開始スキル習得にも取り組んでいきたいと思っています。

M2 弘田幸嗣さん 発達に課題のある生徒の把握と適切な指導方法の確立～学習困難の可能性のある生徒の早期発見・支援のシステムづくり～

学習面のつまずきに伴う二次的な問題を未然に防ぐために所属校にある教育資源を一元化し、抽出された生徒への個別の指導計画作成演習を行いました。新たな知見として、MIM-PM アセスメントテストと定期テストに相関があったことから、中学校においても実態把握に活用できることが示唆されました。また、生徒と保護者への特別支援教育啓発の実践は、適切な支援の実現を支える土台となることが予見されました。今後、効果検証を適切に進めていきます。



M2 山浦祐香さん 特別支援学校における就学前教育と義務教育の接続



私は、就学前教育と義務教育の移行支援について、デンマークの特別教育と比較しながら、より良い引継ぎの方法を明らかにしていくことを目的としました。指導者の専門性に関しては、日本の今ある制度で、保育士と教員の交流や一日体験、指導方法の共有や研修を重視することが手立てになると考察しました。移行支援では、共通の引継ぎ資料の活用や指導経過を計画に反映させることをシステム化する方法について今後考察していきたいと考えています。

M1 池川真妃さん 小学校通常の学級における合理的配慮の在り方について～通常学級における集団指導と個別指導の調整および複数指導者でのチーム支援の在り方の検討～

通常学級における合理的配慮の在り方について、集団指導と個別指導の調整および複数指導者でのチーム支援の在り方について研究しています。多様な児童たちがいる学級では、ファーストステージ指導として、授業や教室環境の構造化、ルールの視覚化、担任の肯定的な声かけや指導者間の連携が、問題行動の予防や適切な言動の増加につながったと考えられます。合理的配慮が一層具体化されるよう、今後も継続してコンサルテーションを実施していきます。



M1 小西留美さん 高等学校における主体的な学びを図る授業の改善～教科教育のユニバーサルデザイン化の実態把握～


多様な学びのスタイルをもつ生徒に分かる方法で一斉授業を展開する授業のユニバーサルデザイン化(UD化)について研究しています。特別な教育的ニーズのある生徒が在籍するクラスを想定して英語科の授業のUD化を取り入れた学習指導案を作成して模擬授業を行ないました。「いろいろな生徒が授業に参加できる」と受講者から反響がありUD化のメリットを実感しました。今後はUD化の実際の有効性について実践的な研究を進めようと思っています。

M1 近藤修史さん 子どもの発達特性に応じた「わかる」「できる」を成立させる教科指導法のあり方を探る～算数LDに焦点をあてて～

小学校第1学年において、アセスメントによる算数困難の分析を行い、通常学級における段階的支援を活かした効果的な指導の在り方を明らかにする取組みを進めています。先行研究分析及び授業実践を通してつまずきの要因を捉えることで、個別最適化を目指した支援の具体化が必要だと分かりました。今後は、個別指導を通して有効性の高い手立てを蓄積し、それらを活用した通常学級におけるファーストステージ指導の充実に向けた研究を進めていきます。


M1 友永しのぶさん 組織的に取り組む特別支援教育の在り方～発達障害のある子どもたちの仲間づくり～


発達障害のある子どもたちが安心して過ごせる学級・学校を作るため、「プロジェクトアドベンチャー（PA）を用いた仲間づくり」「チーム支援の在り方」の研究を進めています。PAの実施後は生徒どうしの関わり合いや助け合いが増えてきました。今後はPAに加え「生徒の実態に応じた指導プログラム等の開発」「生徒の思いを受け止めた行動問題学校チーム支援」について研究したいと考えています。

M1 前田正博さん インクルーシブ教育システム構築のための体制づくり～病弱及び身体虚弱の児童生徒の通級指導教室における指導方法について～

特別支援学校（病弱）では、心身症や精神疾患のある児童生徒さらに発達障害を併せ有する生徒が増えています。そのため認知特性に応じた環境調整や教材の工夫をした指導が必要です。私は特別支援学校における通級指導教室を研究していますが、病弱に関わる実践報告はまだ少なく、発達障害を対象とした通級指導教室の指導方法を参考にするとともに、読み書きの指導に有効であるアプリの使用などICTを活用した指導方法も検証していきます。


【各コース別・テーマ別協議内容】

学校運営コースでは、4名の院生の共通点として、自立した組織や個を確立する方法を探っており、それぞれの立場から豊かな組織を目指している点を確認しました。その後、フロアの皆様方からのご質問や現場での事例紹介をいただき、研究を高知県の教育に還元する汎用化の視点から、個別の事例を扱いながらも、それを抽象的で一般的な概念として使用可能にすること、また抽象化したものを学区に広めるためのシステム構築が必要であることが話し合われました。

教育実践コースの生徒指導・特別の教科道德のグループでは、「子どもの可能性を伸ばすための予防的・開発的な手立て」をテーマとして、各学校の具体的な取組の共有や院生から出された課題についてフロアの方々と意見交流をしました。また、教科（数学・理科・英語）のグループでは、高知県の学力における課題とその背景及び解決策について、院生自身の過去の実践や実習での実践から、教師主導の傾向、指導の工夫等、率直な意見が出されました。

特別支援教育コース「松本ゼミ」グループは、学校現場における「早期発見」「見立て」「手立て」の方策や「見立て直し」「手立て再考」となるきっかけは何かについて、院生と参加者全員で意見交流を行いました。

「是永ゼミ」グループは、「通常学校と特別支援学校の連携」「集団支援と個別支援の両立」「学校種間連携のための引継ぎ」の3つの柱で協議し、関係諸機関が効果的に連携するために必要な視点について共有することができました。

それぞれの院生の研究に対して、より幅広い視野で高知県の教育課題を捉え、社会と協働して教育改革をリードしていくための期待が多く寄せられました。高知県の子ども達が自己実現できるための可能性を広げる教育内容が、院生たちの研究結果から得られ、志ある教員が育つ期待も語られました。

次回の「第4回土佐の皿鉢ゼミ」は、2020年2月2日（日）開催予定です。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 柳林信彦

編集者：教職実践高度化専攻ニューズレター委員

発行日：2019年9月30日

事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター

〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）

TEL 088-844-8457

E-mail ks33@kochi-u.ac.jp